

台湾人作家としての安能務と、 その編訳『封神演義』の特徴について

Biography of Taiwanese novelist ANOU Tsutomu and the characteristics of his edited translation of “*Fengshen-Yanyi*”

中 塚 亮

Ryo NAKATSUKA

はじめに

『封神演義』は明代に成立した中国古典小説であるが、日本において『封神演義』といえば、もっとも知名度が高いのは藤崎竜の同題漫画『封神演義』であろう¹⁾。だが、『封神演義』(以下、単に『封神演義』と表記する場合は中国古典小説の『封神演義』を指す)の普及に与えた影響の大きさという点では、その藤崎版が参考になっている安能務の編訳(以下、「安能訳」)を見逃すことはできない²⁾。一般的には『封神演義』は安能訳を介して事実上初めて紹介されたに近く³⁾、また、藤崎竜の漫画版を始めとして多くのサブカルチャー作品の源流ともなった。

例えばTRPG『央華封神』はそのデザイナー・作者である友野詳が「もちろんベースになったのは中国の古典である」⁴⁾『封神演義』

ですが、特に安能訳^マ版です。先にそっちを読んで、これをTRPGにしようと思ったのです。いまでは、あのバージョンに色々あるのはわかっていますが、やっぱり影響は大きいですねー」と述べているように明確に安能訳の影響下で創作されている⁴⁾。

キャラクターについても、『封神演義』の哪吒は、安能の誤読によって「ナタク」という読み方で受容された。一例を挙げれば、CLAMPの漫画『X』に登場する「那吒」は「ナタク」と読まれるのみならず、哪吒を一種の人造人間とみなす安能の解釈を承けて人工的な生命体と設定されており、安能訳の影響下に生まれたものといえる⁵⁾。『新機動戦記ガンダムW』のガンダムナタクも安能による「ナタク」読みを承けての創造であろう⁶⁾。これら

1) 藤崎竜『封神演義』全23巻、集英社、1996-2000。

2) 安能務『封神演義』上・中・下、講談社文庫、1988-1989。

3) 『封神演義』については三浦義臣(『支那小説封神伝』言海書房、1935)・木嶋清道(『封神演義』講光社、1977)による抄訳がすでに存在していたが、いずれも多くの読者を得たとは言いがたく、中国文学者などを除いては『封神演義』という名前さえあまり認知されていなかった。両訳については拙論「『封神演義』の日本における受容—三浦義臣・木嶋清道の翻訳を中心に—」(『中国古典小説研究』21、2018)を参照されたい。

4) 友野詳公式twitter (<https://twitter.com/gmtomono/status/486878239030145024>), 2014.7.9。(2022.5.12 閲覧)

5) CLAMP『X』既刊18巻、角川書店、1992-。なお、「哪吒」を「ナタク」と誤読するのは安能訳に限らず、前出の三浦義臣訳のほか、邱永漢『西遊記』(『実力狂の時代』中央公論社、1959、p.54など)にも見られる。邱の『西遊記』を安能が目にし、その誤読を継承している可能性は否定できない。だが、作品の普及度や出版時期を考慮するに「ナタク」読みを広めたのは安能訳と、それを承けた諸作品の影響によると考えるのが妥当であろう。

6) 『新機動戦記ガンダムW』創通・サンライズ、1995.4-1996.3。ガンダムナタクについては山下一

の作品は安能訳の受容例のひとつといえる。

一方で、同訳は「ナタク」に代表される誤読をはじめ、二階堂が「これはいわば翻訳ではない」、「『封神演義』を広めた功績は評価したいが、これを原作そのままだと思ってしまう人もいて、その弊害も大きい。せめて『翻案』とでも称してほしい」と苦言を呈しているように⁷⁾、大幅に中国古典小説『封神演義』から乖離した内容となっている。

ただし、この改編については、次の言葉に見えるように安能自身も自覚的であった。

読んでみると繰り返しが多かったり、時間的に前後が逆転していたり、空間的な錯誤があったり、そういう意味では原典に問題があって、現代の人が読んでおかしくないように作り替えが必要だったわけです。話の矛盾や錯雑を訂正するという以上に、ほとんどテーマの設定からストーリーの展開、人物たちのキャラクター設定まで考えたわけです。だから、これは訳というより実際は創作に近いんです⁸⁾。

『封神演義』はながらく原典に準拠した全訳が存在せず、そのことが「誤った」安能訳を介した受容を招き、ひいては『封神演義』に対する誤解を生じてきた。そのために安能訳はしばしば否定的な評価を受けてきたが、全訳本も出たいま⁹⁾、「誤った翻訳」としてではなく安能務によるひとつのオリジナリティ

を持った作品としてとらえ直すべき時期が来ていると論者は考える。

本稿では安能訳再評価の第一歩として、まず、安能務という人物について探る。後述するように安能は自らの出自・経歴についてほとんど語らず、わずかに公開されたプロフィールでさえ資料間で矛盾があるなど、意図的に自分が何者なのかを伏せているように思われる。まず、安能自身の文章から、安能務についてわかることを一度、整理・確認しておきたい。

また、安能訳が用いている典拠・資料を調査するとともに、安能がどのような創作を加えているかを検討することで、『封神演義』安能訳の特徴について明らかにしていく。

安能務について

安能務という人物を見ていくに当たって、まずその筆名から考えたい。安能務という名は「安くんぞ能く務めん」と読むことができる。また、安能は「あのう・つとむ」と名乗る前に同じ「安能務」表記で、「あん・のうむ」と読ませていた時期がある¹⁰⁾。「あん・のうむ」には「unknown」の読みが重ねられている。「安くんぞ能く務めん（どうして力を尽くすことができるだろうか）」ととぼけ、「unknown」の意を含ませるその筆名からは安能の韜晦の意思が読み取れる。

「unknown」を名乗り、自らの姿を曖昧にしようとする安能の姿勢は、その生年や出自の自称にも現れている。安能のプロフィールについてはその著作所載のもので四種類確認できる。

夫が「『封神演義』とメディアについて」（『全訳封神演義』3、勉誠出版、2018）にて指摘している。
7) 二階堂善弘『封神演義の世界』東方書店、1998、p.197。

8) 「中国物はなぜ読まれる？ その謎に迫る 知られざるベストセラー『封神演義』の訳者に聞く」『鳩よ！』1997年4月号。

9) 二階堂善弘監訳、山下一夫・中塚亮・二ノ宮聡訳『全訳封神演義』全4巻、勉誠出版、2017-2018。

10) 管見の限りでは、「安能務」に「あん・のうむ」の読みを当てているものとして、「『救心』と『庄三郎』と軍事技術」『諸君！』16(2)、1984.2、「台湾人から見た全斗煥訪日」『文芸春秋』62(12)、1984.11、の2篇がある。



安能務氏

読売新聞
(1998.12.11 夕刊)

1919.8.10, 東京生まれ(『すばる』集英社, 1990-1 など¹¹⁾)

1922, 台湾生まれ, 香港大学卒業(『権力とは何か』文春新書, 1999)

1925, 台湾生まれ, 香港大学卒業, 2000.4 死去(『韓非子』文

春文庫, 2000)

1932, 台湾生まれ, 香港大学卒業(『始皇帝』文春文庫, 1998)

本人も確認しているであろう著作のプロフィールでこれだけ差異が生じるということは、自分が何者であるかを曖昧にしておきたいという意図があると考えられる。さらには、自ら執筆した記事の著者紹介に「生年月日, 出身, 血液型, 経歴など, すべてのプロフィールは不詳」とするものすらある¹²⁾。生年についてはばらばらで検討できないとして、出自については「東京生れ」とする『すばる』を例外として、ここに挙げたプロフィール以外の記事でも台湾生まれとするか¹³⁾, そうでなければ台湾人としている¹⁴⁾。出生地・国籍に揺れはあるが、台湾との関わりは認めていると見てよい。学歴については香港大学卒業としているが、この「香港大学」が次の手がかりへとつながっている。

かれこれ半世紀ほど前のことである。香港大学の社会学教室の教壇で、大多数が漢字の読めない学生を前にして、Han Fei Tzu (韓非子) の講義をしていた Dr. Joshua W.K.Liao (ジョシュア・リヤア博士) が、いきなり背後の黒板に「勢」という漢字を大書した¹⁵⁾。

この「ジョシュア・リヤア」こと廖文奎(1905-1952)は哲学研究者で、台湾独立運動の理論家としても『Formosa Speaks』などの著作を残している¹⁶⁾。同志社中学, 南京・金陵大学で学んだ後1931年にシカゴ大学で哲学の博士号を取得。金陵大学などで教員となる。1947年、「二二八事件」が勃発すると、上海・香港にて弟の廖文毅とともに「台湾再解放聯盟」を設立、また香港大学で教鞭を執った。上述の香港大学での『韓非子』の講義はこのときのエピソードであろう。1952年に香港にて逝去¹⁷⁾。

安能が実際に香港大学の学生であったか、自身が教室でその講義を受けたかどうかはここでは問わない。ただ、論者はこのエピソードは安能の廖文奎への師事を示すものになっていると考える。安能は『韓非子』を著すなど韓非子への傾倒を見せるが、ここにも廖文奎の影響があるのではないだろうか¹⁸⁾。

また、廖文奎の弟である廖文毅(1910-1986)は、「台湾再解放聯盟」にて台湾独立運動を始めると、その後拠点を日本に移し、1950年

11) 連載「馬馬虎虎」『すばる』1990年1月号～6月号の「作者紹介」による。

12) 安能務「就仙人」『電撃アドベンチャーズ』3, 1994.6。

13) 「吉川以降」の『三国志』続々『読売新聞』1998.12.11(夕刊)。なお、上掲の安能の写真も本記事によるが、管見の限り安能の写真は本記事以外では確認できない。

14) 前掲安能務「『救心』と『庄三郎』と軍事技術」・「台湾人から見た全斗煥訪日」。

15) 安能務『韓非子』下, p.334。

16) Joshua Liao『Formosa Speaks』The Formosan League for Re-mancipation, 1950。

17) 勁草『台湾獨立運動前奏曲(1945-1991A.D.)』台湾五南圖書出版股份有限公司, 2015, 吳叡人「祖國的辯證: 廖文奎(1905-1952) 臺灣民族主義思想初探」, 洪子偉編『存在交渉: 日治時期的臺灣哲學』聯經出版, 2016, 参照。

18) 安能務『韓非子』上・下, 文藝春秋, 1997, のち文春文庫, 2000。

に東京にて「台湾民主独立党」を、ついで1956年には「台湾共和国臨時政府」を組織しその大統領に就任する。最終的に、廖文毅は1965年に独立運動を放棄して台湾に戻り、中華民国政府に投降することとなるが、戦後日本における台湾独立運動の中心人物のひとりであることは疑いない¹⁹⁾。

安能は「彼と面識があったから言うわけではないが」と述べ、廖文毅と直接の関係を有していたことを明言したうえで²⁰⁾、「廖文毅も人間だから、人間的な欠陥や性格的な瑕疵は免れなかったが」と保留をつけながらも「たしかに一代の英雄であった。恐らく台湾人としては不世出の英雄である」と絶賛に近い言葉を残している²¹⁾。皮肉屋で冷笑的な安能としては例外的と言って良い。

さらには、『八股と馬虎』第一八章では、三頁にわたって台湾共和国臨時政府を取り上げている。この台湾共和国臨時政府は一時的な盛り上がりこそ見せたものの、1960年代には衰退し日本国内でもほとんど知られていなかったという²²⁾。また、同政府は丸谷才一『裏声で歌へ君が代』が題材として取り上げているが、その出版当時の書評では台湾共和国臨時政府自体が架空の存在と誤解されていたと垂水千恵が指摘している²³⁾。このように、その知名度は決して高いとは言えないだけに、安能の言及の特異さが浮かび上がる。

安能がその出自・経歴をぼやかすこと、そしてペンネームに込めた韜晦的な姿勢は、廖

文奎や廖文毅、さらに臆断を恐れずに言うならばこの台湾独立運動に自身が関与していたことによるのではないだろうか。

安能は『八股と馬虎』の中で他にも廖兄弟や台湾独立運動との関係を窺わせている。安能は「実は廖文毅帰台の真相を知る者はいない。いや、廖文毅が帰国の前に国府との予備交渉で取り交わした文書を預けた男（約束によって名を伏す）がいると聞いて、その男なら知っていようと訪ねたが、彼は黙して語らず」と述べるが、この書きぶりはこの「文書を預けた男」こそが安能自身であることを仄めかしているのではないだろうか²⁴⁾。

また、安能は「特定の仲間を読んでもらう文章は半世紀以前から書いていたが、不特定多数の読者を相手に、売文の業を始めたのは六年前であった。講談社文庫で『封神演義』を編訳したのが始まりである」と記すが、あるいはこの「特定の仲間を読んでもらう文章」も独立運動にまつわる政治活動的な文章かも知れない²⁵⁾。

とはいえ、先述の通り安能は自身についてほとんど語らないため、現時点では片言隻句を頼りとした推論が限界である。ここでは、安能が廖文奎や廖文毅、台湾共和国臨時政府に近い、台湾出身者ないし台湾人だったのではないかということまでにとどめ、今後の解明に期待することとしたい。

安能訳『封神演義』について

以上では安能務という人物について考察してきたが、ではその安能が編訳した『封神演義』にはどのような特徴があるのだろうか。

まず、安能が用いた底本について確認しておく。そもそも『封神演義』では版本間でのエピソードの出入・ストーリーの変更といっ

19) 前掲勁草『台湾獨立運動前奏曲(1945-1991A. D.)』、郭銳『戦後日本における台湾独立運動に関する研究』神戸大学提出博士論文、2018、参照。

20) 安能務『八股と馬虎』講談社文庫、1995、p.393。
21) 前掲安能務『八股と馬虎』p.393。

22) 前掲郭銳『戦後日本における台湾独立運動に関する研究』pp.80-81。

23) 丸谷才一『裏声で歌へ君が代』新潮社、1982、垂水千恵「丸谷才一の顔を避けて：『裏声で歌へ君が代』試論」『新潮』111[11]、2014.11。

24) 前掲安能務『八股と馬虎』p.392。

25) 前掲安能務『八股と馬虎』p.448。

たレベルでの大幅な相違は見られない。ボリュームダウンを企図して文辞を節略した簡本が存在すること、および清末の鉛印本以降で加えられた第99回の封神榜の改変が最大の差異であるといえる²⁶⁾。

そのうえで、安能は「香港五桂堂書局本」を底本とすると述べている²⁷⁾。確かに、版本によって表記が分かれる王天君の名前については、五桂堂本・安能訳ともに「王奕」とし（現存最古の明・舒冲甫刊本などでは「王奕」とする²⁸⁾、聞仲の騎獣についても五桂堂本・安能訳ともに「黒麒麟」とする（舒冲甫刊本などでは「墨麒麟」とする）。また、版本間での相違が見られる封神名簿でも、他版本の多くが地耗星を「姚燁」とするのに対して五桂堂本・安能訳ともに「姚焯」とし、同じく随斗部九曜星官の「劉禁」を五桂堂本・安能訳ともに「李禁」とするといった一致が見られるため、安能訳が五桂堂本を底本として利用していることは事実かと思われる。

ただし、そのような表記上の揺れの一致こそあれ、五桂堂本は管見の限りでは諸版本と同様に大幅な変更は見られず、以下に挙げる安能の誤りや独自の設定・改編との一致は見られない。たとえば、安能は四大諸侯の一人「姜桓楚」を「姜楚桓」に誤るが五桂堂本では「姜桓楚」のままであり、安能が「黒点虎」に変更する申公豹の騎獣も「白額虎」のままである。これらは底本である五桂堂本に由来するものではなく、あくまでも安能訳の特徴

である。

なお、安能訳の誤り・改編についてはすでに二階堂などにより多くの指摘があり、本稿でも参照していることをことわっておきたい²⁹⁾。

①単純な誤り

上述した「哪吒」の「ナタク」（本来は「ナタ」）読みの他、「武吉」の「ブキチ」（同「ブキツ」）読みや、「姜桓楚」を「姜楚桓」に誤るなどの単純な誤りが多数見られる³⁰⁾。特に「哪吒」の「ナタク」読みは藤崎竜の漫画で採用されたこともあり、近年まで広汎に定着するなど大きな影響を与えてきた³¹⁾。これらは安能訳の影響を受けている目印ともなっており観察点としては興味深い³²⁾が、単なる誤りであるため本稿では掘り下げない。

②誤った説明

安能は「まえがき」で『封神演義』の解説をしているが、その多くは安能の創作であり、事実ではない。『封神演義』を中国の「三大怪奇小説」とする、受容者の姿勢によって『商周演義』『封神演義』『封神榜演義』などと様々に呼ばれた（様々な表記はあるが、受容姿勢とは無関係である）、儒家が太公望の功績を覆うために『封神演義』を貶斥した、といった記述はいずれも誤りであり、安能の創作と考えられる³²⁾。

ただ、その中で「（『封神演義』には）定本

26) 『封神演義』の版本については尾崎勤「『封神演義』の簡本について」（『汲古』51, 2007.6）・「『封神演義』第九十九回の問題」（『汲古』65, 2014.6）・「『封神演義』版本概論」（『和漢語文研究』19, 2021）、岩崎華奈子「徳聚堂刊文簡本『封神演義』について」（『中国文学論集』46, 2017）・「『封神演義』四雪草堂系版本三種について」（『中国文学論集』50, 2021）参照。

27) 前掲安能務『封神演義』上, p.21。

28) 『封神榜演義』3, 五桂堂書局, p.110, など。

29) 二階堂善弘「『封神演義』について」（『全訳封神演義』1, 勉誠出版, 2017）、「『間違いだらけの封神演義』掲示板」（http://www1.plala.or.jp/fengshen/basic/community/docs/mdfybbs_log_03.html）、うづき「雑記」（<http://yayousu.secsaa.net/>）など。（両ウェブサイトはともに2022.5.15閲覧）

30) 前掲二階堂善弘「『封神演義』について」。

31) 近年日本で公開された中国映画『羅小黑戦記』（2019）や『新神榜：哪吒重生』（邦題『ナタ転生』（2021）では「哪吒」に「ナタ」の読みを当てている。

32) 前掲安能務『封神演義』上, pp.7-27。

と称されるものではなく、百回本もあれば百二十回本もある。ちなみに日本の宮内庁には、許仲琳編の百二十回本があると聞かすが、それは中国では見当たらない³³⁾との説については、誤りではあるものの『辞海』や『中文大辞典』にも同様の「日本有明刊本、題許仲琳編、凡一百二十回」という記述が見られることはことわっておきたい³⁴⁾。両書では宮内庁所蔵とはしないため、別の典拠に由来するのかもしれないが、あるいは安能の「解説」の中には同様に（誤った）典拠があるものが含まれる可能性は否定できない。

以上は純粹に「誤り」と呼べる改編、あるいは記述である。以下では安能による作品の意識的な改編に当たる例を見ていきたい。

③「定説」の採用による改編

安能は『封神演義』を翻訳するに当たって、「社会に存在する牢固たる『定説』を黙殺することは、やはり適切ではない。それで幾つかの場所では、あえてその定説に従った」と述べている³⁵⁾。ここでいう「定説」とは人口に膾炙した説話を指すが、安能訳にはどのような「定説」にもとづく改編が見られるだろうか。

一. 文王車を曳く

「定説」の例として安能が「まえがき」で挙げているのが「文王車を曳く」である。

原典では——磻溪で太公望を軍師に迎えた文王は、太公望と同車して帰城した——ことになっている。しかし巷の人々は——太公望が車に乗り、その車を文王

に曳かせた——と信じて疑わない。「文王車を曳く」——は有名な芝居（の題目）であるが、すでにその光景が深く人々の臉に焼きついているからだ。³⁶⁾

安能訳本文でもこの通り、太公望は渭水から帰る際に、文王に自らが乗った車を曳かせ、歩いた歩数（280歩+449歩）を周王朝（西周+東周）の命数と予言するという書き方となっている³⁷⁾。ここは、二階堂が「安能版の故事は、すべてが安能氏のオリジナルではない。たとえば、文王が姜子牙の乗る車を牽いて周王朝の長さを測る故事は、これは演劇などで「文王拉車」として有名なものである」と述べるように³⁸⁾、安能の説明通り演劇・語り物に沿ったものとなっている。

たとえば京劇「渭水河」では、「（太公望=姜子牙は）主君に対して礼をするとすみやかに車に乗る。姜子牙は車に乗ると仔細に主君の様子を見る。……（文王が車を曳いて）八百八歩歩くといそぎ車から降りる。のち周の天下は八百八年保たれる」との歌辞が見られる³⁹⁾。また、椰子腔「渭水河」では太公望から車を曳くよう促された文王がひとしきり抵抗した後にはいやいや曳き始め、八百八歩で力尽きてから、この歩数がすなわち周王朝の命数であると知らされるともう一度曳こうとするというやりとりがみられる⁴⁰⁾。

（文王）ああ、先生そういうことでしたら車に乗って下さい。私は何としても先生を皇城まで曳いていきますぞ。

36) 前掲安能務『封神演義』上, pp.19-20。

37) 前掲安能務『封神演義』上, p.441。

38) 前掲二階堂善弘「『封神演義』について」, p.543。

39) 「對主公施一禮忙登車輦, 姜子牙坐車輦細把君觀。……行八百單八歩忙退車輦, 到後來保江山八百八年」, 「渭水河」『戲考』第十冊。

40) 『渭水河』北平打磨廠泰山堂, 東京大学東洋文化研究所雙紅堂文庫蔵本。

33) 前掲安能務『封神演義』上, p.18。

34) 臺灣中華書局辭海編輯委員會編『(最新増訂本) 辭海』上, 臺灣中華書局, 1980, p.1472, 中文大辭典編纂委員會編『中文大辭典』(九版) 3, 中國文化大學出版部, 1993, p.636, など。(当該箇所同文)

35) 前掲安能務『封神演義』上, p.21。

（姜子牙）占いのネタばらしをしてしまいましたから、もうムダでございます。⁴¹⁾

このような文王と太公望のやりとりは椰子腔以外の演劇作品でも見られる⁴²⁾。安能訳の

（歩数が周王朝の命数であると聞き）それと知って姫昌が立ち上がる。「もっと曳けるぞ。曳き直そう」と車から下りようとした。「もうムダでございます」と姜子牙は苦笑する。⁴³⁾

という場面は、これらの芸能作品を参考にしていると思われる。

二. 渭水河での姜子牙への声かけ

一と物語上の順序は逆転するが、文王が賢者を求め渭水に太公望を訪ねる際、原作となる中国古典小説『封神演義』（以下「原典」）では

（文王が姜子牙の背後に近づくと気づいた姜子牙はひとつ歌を歌う。歌い終わるのを待って）文王は問う。「賢者どのは楽しまれておいでか？」
子牙が振り返ると、文王がいる。急いで釣り竿を放り投げて、地に平伏して答える。「殿下のお越しとも存じ上げず、お迎えに参りませんでした。どうか殿下に

はお許しいただきたく」（原典 24 回）

というやりとりになっているが、京劇などでは文王の長子姫発（のちの武王）などが太公望に声をかけては「大魚がかからず小者が来よった。おぬしに用はない。去れ」と軽くあしらわれるというやりとりを多く持つ⁴⁴⁾。

これに対して、安能訳では南宮适が別の男（武吉）を探す中で偶然太公望に出くわす展開とし、そこにこの芝居でのやりとりを組み込んでいる。

「ご老人、ちと伺うが、この淵で泳ぐ妙な男を知らないか？」と南宮适は訊ねたが、返事はない。「おい、ご老人……」と南宮适は同じことを繰り返す。やはり返事がなかった。……「うるさい。大物が食いつかずに、小物ばかりピョンピョン跳ねやがる」と老人はつぶやく⁴⁵⁾。

この他に安能は太公望の釣針について「離水三寸」が「定説」であるとし、「原典では——釣り針が真っ直ぐな、ただの針金だった——とあるが、水面から三寸離れていた、などとは書かれていない」と述べて作中でも「離水三寸」に改めている⁴⁶⁾。このように安能は「定説」を根拠とした改編を行うが、この基準による改編は文王と太公望の出会いの場に集中して現れている。これは本部分が広く語られ、芸能で演じられる名場面であるためにそれだけ「定説」が成立していたということ

41) 「(王白) 微呀先生這樣說來你在請上駒車。孤王我捨死亡生將你拉進皇城。(生白) 陰陽八卦說破。也就不靈了」。

42) たとえば、台湾北管の「渭水河」でもネタばらしを聞いた姫昌との「そういうことでしたら先生、車に乗って下さい。それがしはもっと歩きますぞ」「これは天数で定まったことです。もうこれ以上とは行きませぬ」との会話が見られる。(陳秀芳篇『台湾所見の北管手抄本』1, 台湾省文献委員会, 1980, p.110)

43) 前掲安能務『封神演義』上, p.444。

44) たとえば「二太子(同白) 領旨。漁翁請了。姜尚(白) 釣釣釣, 大魚不到小魚到。用你不著, 去罷」(『渭水河』、『戲考』第十冊), 「小生・帖生〔論者注: 姫昌の二子〕領旨。漁翁請了。大花〔姜尚〕釣々々, 大魚不到小魚到。去罷」(『渭水河』, 陳秀芳篇『台湾所見の北管手抄本』1, 台湾省文献委員会, 1980, p.110) など。

45) 前掲安能務『封神演義』上, p.434。

46) 前掲安能務『封神演義』上, p.20。

であろう。

④他の典拠がある改編

芸能などで広まった「定説」の他に、典籍に根拠を持つ改編も見られる。

一. 『六韜』

前節で見た文王と太公望の出会いの場面について安能は「文王に会った太公望は釣り竿を手に、魚釣りにかけて『治世』の原則から説きおこす。……天下の経営をめぐる文王と太公望の政治問答は、しばらくつづく。ちなみに、このとき二人の間に交わされた問答は『史記』にも記録がある。さらには『六韜』に詳しい」と述べるが⁴⁷⁾、原典ではこの場面で両者間での問答は見られない。

安能訳では次に引く部分から二頁にわたって、政治や道についての議論を繰り広げるが、これは『六韜』の節略であり、対応部分(下線部)を取り込んだものである。

姫昌が進み出た。

「釣りをお楽しみようですが、それでも、魚は釣れますか？」と話しかける。
……

「君子はその志を得るを楽しみ、小人はその事を得るを楽しむ。いま吾、漁するは、それにはなはだ似たる有り」

「その——似たる有り——について伺いたい」

「緝(糸)微にして餌、明らかなれば、小魚それを食らい……」(後略)⁴⁸⁾

『六韜』(文韜・文師第一⁴⁹⁾)

文王勞而問之曰「子樂漁邪？」

太公曰「臣聞、君子樂得其志、小人樂得其事。今吾漁、甚有似也。殆非樂之也」

文王曰「何謂其有似也？」

太公曰「釣有三權。祿等以權、死等以權、官等以權。夫釣以求得也。其情深。可以觀大矣」

文王曰「願聞其情」

太公曰「源深而水流、水流而魚生之、情也。根深而木長、木長而實生之、情也。君子情同而親合、親合而事生之、情也。言語應對者、情之飾也。言至情者、事之極也。今臣言至情不諱、君其惡之乎？」
文王曰「唯仁人能受至諫、不惡至情、何為其然？」

太公曰「緝微餌明、小魚食之……」

また、西岐に迎えられた姜子牙による最初の講義も同様に『六韜』(文韜・上賢第九)によるものである⁵⁰⁾。

二. 『老子』

通天教主が繰り出す究極奥義「營鎮抱一」は原典には見られない。この技について安能は「「營鎮」は——動じて身を「營」むをこれ魂といい、静にして形を「鎮」めるをこれ魄という——と云われる場合の「營鎮」にほかならず、それゆえに「營鎮抱一」の第一義は「魂魄抱一」である。抱一の「一」は「道法帰一」の一で、道法の根源にほかならないと説明する⁵¹⁾。

これは、『老子』第十章「載營魄抱一(營魄に載りて一を抱く)」の注に基づく。前段の下線部は范応元の「營魄」への注、「營魄、魂魄也。内観経曰『動以營身之謂魂、静以鎮形之謂魄』」に拠り、後段の二重下線部は陳

47) 前掲安能務『封神演義』上、pp.10-11。

48) 前掲安能務『封神演義』上、pp.440-441。

49) 『孫子集注・六韜・呉子・司馬法』(四部叢刊初編縮本)、臺灣商務印書館、1965。括弧、句読点などは論者が加えた。

50) 前掲安能務『封神演義』上、pp.450-452。ただし、六賊の順序を改めるなどの手は加えている。

51) 前掲安能務『封神演義』下、p.288。

鼓応の「抱一」に対する注、「本章の「抱一」、指魂和魄合而為一。魂和魄合而為一、亦即合於「道」了」に基づいていると考えられる⁵²⁾。

⑤台湾・閩南語との関わり

安能が台湾人と名乗り、プロフィールでも台湾生まれとするなど、その出自に台湾との関わりを窺わせていることは先述した通りだが、台湾との関係は安能訳『封神演義』の中からも見て取れる。

一. 「此巷無路」

ある日、城へ野菜を売りに出た宋異人は、「此巷無路（この路地は行き止まり）」の立札を見て「北港魚落（北港で魚の大安売り）」と読み違える⁵³⁾。

「北港」は台湾中西部の町であり、「此巷無路」を「北港魚落」に見間違えるのは台湾の笑話⁵⁴⁾。もちろん、この記述は原典にはない。

二. 「無心肝」

姐己に求められて心臓を差し出したものの姜子牙の術で生き延びていた比干であるが、無心菜売りの老婆とのやりとりの結果、術が破れて死ぬ。

（比干は）尋ねて言う。「無心菜とはどのようなものか？」

婦人は言う。「わたしが売っているのが無心菜でございます」

比干は言う。「人にもし心臓がなかった

らどうなる？」

婦人は言う。「人にもし心臓がなかったら死にます」（原典 27 回）

安能訳では次のようなやりとりになっている。

「婆々、その野菜は青々としているのに、なぜ無心菜か？」

「はい、野菜は心がなくても生長します」

「ならば無心鬼は？」

「心ない憎まれ者は、世にはばかります」

「では無心肝は？」

「心肝のない人間は、言われたことをすぐ忘れます」と老婆は答えた。「無心肝」

には「心臓がない」という意味のほかに、

もう一つ「物忘れがひどい」意味がある。

老婆の答えに、比干はハッとした。姜子牙から——絶対に口をきいてはならない——と固く禁じられていたのを思い出したからである⁵⁵⁾。

ここに出てくる「無心肝」の「物忘れがひどい」という用法は台湾で用いられる閩南語に見られるものである⁵⁶⁾。

三. 「老鰻」

この淵には「ゴロツキ」が棲みついている。……寸詰まりの巨大な鰻の化物のような姿をしているから、地元の漁師たちはそれを「老鰻（ラウマン）」と呼んだ。それが訛って「流氓（リュウマン）」つまり「ゴロツキ」となる⁵⁷⁾。

52) とともに陳鼓應『老子註譯及評介（重校本）』中華書局、2012、p.130。

53) 前掲安能務『封神演義』上、p.266。

54) 「【此巷無路】看錯字的笑話。謂把此巷無路四字看成北港魚落」, 陳修『台灣話大詞典（再版）』, 遠流出版事業股份有限公司, 2000、p.447。

55) 前掲安能務『封神演義』上、pp.388-390。

56) 「【無心肝】記憶力差」。『教育部臺灣閩南語常用詞辭典』オンライン版 (https://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/default.jsp)。

57) 前掲安能務『封神演義』上、p.419。

台湾で「老鰻」は「流氓」（ごろつき）の意で用いられる⁵⁸⁾。「流氓」は「流氓」の誤り）大魚「ゴロツキ」は原典には登場せず、この一段は安能訳の創作である。

四. 「黙々三杯半」

「われらが主君武王には、覇権への野心はない。諸侯との会盟は、紂王を誅伐するのではなく、観政のためだと称して出駕を仰いだ。……」と姜子牙が言った。なるほど、と諸侯は納得する。

「武王はやっぱり聞き及んだ通り仁義に厚いお方じゃ」と大方の諸侯は感じ入って顔を見合わせた。

「なに——黙々三杯半——じゃないのか？」とは口に出さなかったが、妙な苦笑に口をゆがめた諸侯もいる⁵⁹⁾。

孟津での諸侯との会盟に当たっての姜子牙の口上だが、この「黙々三杯半」は閩南語の「恬恬食三碗公半（掂掂吃三碗公などとも）」に由来し、「黙って、こっそりと人がびっくりするようなことをする」の意である⁶⁰⁾。ここでは表向き野心がないといいながら、こっそりと覇権を握る気ではないか、と誹っていることになる。

五. 「烏秋」

水牛の怪である金大升を追いかけるときに楊戩が「烏秋（牛と仲良しの小猛禽）」に化ける⁶¹⁾。この展開は原典に見られない。この「烏秋（烏鶯）」は台湾で見られる鳥で、しばしば農村では水牛の背に停まりその身の虫を

食べている姿が見られるという⁶²⁾。これも台湾の習俗を取り込んだものと言えよう。

安能訳では「犢は虎を恐れず」（「初生牛犢不怕虎」）のようにしばしば中国の諺・定型句を訳中に織り込んでいるが⁶³⁾、同様に台湾での言い回し・習俗を用いている。これは取り立てて意図的に台湾由来の要素を潜ませたのではなく、台湾出身(?)の安能にとってはごく自然な表現として使われているのであろう。

⑥安能による創作

以上の③～⑤は『封神演義』以外の資料・材料を取り込んだものであり、これを除いた改編部分がすなわち安能の純然たる創作箇所となる。先述の通り安能訳では安能自身が「テーマの設定からストーリーの展開、人物たちのキャラクター設定まで考えた」と述べているように全体に及ぶ大幅な改編が加えられており、その変更点は枚挙に暇がない。ここでは、最も影響が大きな改編例として、作品の性格自体を大きく変質させる改編である、申公豹というキャラクターの設定を取り上げる。

申公豹は太公望の弟弟子であり、原典では封神の任務を与えられた太公望に対して、それを妨害するべく多くの仙人・妖怪を唆しては敵として送り込む悪役である。原典の申公豹は、その出自も意図も明確ではなく、その道士としての能力も太公望には勝るものの特筆するほどではないと設定されるが、安能訳では帝堯から譲位の申し出を受けるも拒絶し、その耳を洗ったというエピソードで知られる隠者の許由がその正体であるとする。さらには太上老君の庇護を受け最強の宝器であ

58) 「臺灣老鰻傳奇」, 吳坤煌『吳坤煌詩文集』國立臺灣大學出版中心, 2013, p.142。

59) 前掲安能務『封神演義』下, p.342。

60) 「【恬恬食三碗公半】比喻人默默地做出令人驚訝或讚嘆的事」。前掲『教育部臺灣閩南語常用詞辭典』。

61) 前掲安能務『封神演義』下, p.393。

62) 「烏鶯」, 前掲『教育部臺灣閩南語常用詞辭典』。

63) 前掲安能務『封神演義』中, p.345。

る雷公鞭を持つと設定される⁶⁴⁾。

封神についても闡教側による截教肅清の陰謀であるとし、それを阻止するために動いており、「一人ぐらいはバカな正義の味方がいてもよろしいのでは？」という台詞や⁶⁵⁾、その騎獣黒点虎との

「戦いの勝ち負けはオレの知ったことではないんだ。ただ、不当な仕打ちには敢然と戦え。座して死を待つな、とオレはハッパをかけているまでのことだよ」

「しかし師匠。戦えばどうせ負ける、と知りながらそうけしかけるのは残酷ですよ」

「黙っとれ。お前になにがわかるか。いつかも言ったように——条理が曲げられたのを見て閑人騒ぎ出す——おれはその閑人じゃよ」⁶⁶⁾

というやりとりから見て取れるように、ある種の正義・正しさのために太公望の前に立ち塞がるキャラクターとして描かれている。申公豹の存在とその主張によって、闡教－西岐の「正しさ」は相対化され、その正当性に疑問符が附されているのである。安能訳では、このような正義への疑念を口にするのは申公豹だけではない。

次に、殷の大師聞仲と、その部下にして元山賊の辛環との会話を見てみよう。

（論者注：辛環）「われわれは仲間だからです。……どうせ掠奪をする仲間だから、やれ道徳だ、倫理だと心にもないことを持ち出して、互いにだまし合う必要もなく、誰が偉くて誰が偉くないか、を区別

する必要ありません。唯一の徳目は、とにかく互いに約束ごとを守ることで……」

（論者注：聞仲）「妙な世界があるものよ、のう」

「われらの世界はまともで、太師が身をおかれている世界こそおかしいのです。朝廷も人民からすれば、単に税という財貨を収奪する集団にすぎません。それでいて仰々しく道だ徳だ、仁よ義よ、忠の恕のと誰も本気にせず、本人すら意にも留めていないきれいごとを並べ立てるのは滑稽千万、というより人をバカにしております」⁶⁷⁾

ここではお題目を掲げる政治の世界・権力の世界はおかしく、山賊の世界こそが「まとも」なのだと言られる。これは天数にしたがい殷周革命・封神を執行するとうたう太公望・闡教側の正しさを不当だと訴える申公豹と同じ態度である。

このやりとりにも見て取れるように、安能訳では作中にてしばしば儒家や権力側が体现するとされる「正しさ」への懐疑が語られる。申公豹を代表として、この繰り返し語られる懐疑は、作者である安能自身が抱く懐疑であるといって良からう。その意味で、申公豹こそが安能のこの「正しさ」への疑念、もうひとつの「正義」を具現化した存在だといえるのではないだろうか⁶⁸⁾。

おわりに

安能務訳『封神演義』はこれまで、その影響の大きさに比してその作品自体の特徴をき

64) 前掲安能務『封神演義』上、pp.51-53。

65) 前掲安能務『封神演義』上、pp.101-102。

66) 前掲安能務『封神演義』下、p.136。

67) 前掲安能務『封神演義』中、p.306。

68) この主張の背後には、先述した台湾共和国臨時政府による台湾独立運動と安能とのつながりも想像されるが、現時点ではそれを論じるに十分な材料がない。今後の課題としたい。

ちんと論じられる機会がなかった。それは作者である安能務も同様である。

本稿では、安能自身が意図的に曖昧にしているその出自・経歴について整理・確認するとともに、台湾独立運動との関わりをもつ人物である可能性を指摘した。

また、安能訳の特徴として、『六韜』などの古典の他、芸能作品などで語られてきた『封神演義』にまつわる「定説」を作品中に反映していること、台湾の諺なども利用していることも明らかになった。さらに、安能訳の創作部分では儒家・権力側に代表される「正しさ」への懐疑を語っていること、別の「正しさ」を体現する存在として申公豹とい

うキャラクターの性格を改めていること、それによって主人公側（闡教－西岐）の「正しさ」を相対化し作品自体の性格にも影響を与えていることを確認した。

以上の議論により、安能訳は『封神演義』の翻訳としてではなく、ひとつの独立した創作作品として論じるべきオリジナリティをもった作品であることがあらためて確認された。本稿は安能訳再読の端緒に過ぎない。今後のさらなる再評価が待たれる。

本研究はJSPS科研費22K00372の助成を受けたものです。